

イメージ調査法によって測定される感情イメージの展望(2)

—感情イメージの構造と応用的展開—

A Review on Affective Imagery Measured by the Inquiry of Affective Imagery (2): Structure of Affective Imagery and Applied Development

堀内 正彦*・鈴木 賢男**・松野 真***・
鈴木 国威****・大石 昂*****・岡田 斉*****

Masahiko HORIUCHI, Masao SUZUKI, Makoto MATSUNO,
Kunitake SUZUKI, Takashi OISHI, Hitoshi OKADA

要旨：感情イメージとは、ある対象についてのイメージに伴う感情的側面であり、この感情イメージを測定するための方法の1つとしてイメージ調査法(上杉, 1981)がある。そのイメージ調査法と感情イメージについて、イメージ調査法の特徴、他のイメージ測定法との比較、理論的背景、感情イメージの不変性・安定性などの観点から展望的に論じられている(堀内他, 2020)。本稿は、その展望に基づく続報であり、1980年代を中心に進められた一連の研究、および2000年以降に行われた研究において示された感情イメージの構造について概観する。その上で、感情イメージ研究の応用可能性としてデートDVへ展開について論究する。

キーワード：感情イメージ, イメージ調査法, 感情, イメージ測定, デートDV

I はじめに

感情イメージには、様々な測定方法が存在する。その1つとしてイメージ調査法(上杉, 1981, 1982, 1983, 1989)がある。イメージ調査法とは、対象語(例えば、私、父、母、など)と8つの感情語(喜、望、愛、驚、悲、恐、怒、嫌)を対にして調査対象者に示し、対象語の具体

* ほりうち まさひこ 客員研究員・文教大学人間科学部・駒澤大学文学部

** すずき まさお 客員研究員・金沢学院短期大学幼児教育学科

*** まつの まこと 客員研究員・昭和学院短期大学人間生活学科

**** すずき くにたけ 客員研究員・就実大学教育部

***** おおいし たかし 富山大学名誉教授

***** おかだ ひとし 文教大学人間科学部

的な内容としての対象をイメージさせ、そして、その対象のイメージと感情語のイメージ主観的距離感を5段階尺度（近い-遠い）で調査対象者に評定してもらう方法である。この測定方法の基本的なアイデアは、現前にない対象をイメージとして想起した場合の感情的な側面に着目している点にある。このイメージ調査法の特徴、理論的背景などについて、理論的に展望されている（堀内他，2020）。

本稿は、堀内他（2020）の展望を発展させて、イメージ調査法を用いた測定によって、個人を取り巻く様々な対象や事象に対するイメージの感情的側面、さらに感情価という合成変数を用いて対象間における連関性、dating violence（デートDV）への応用可能性について展望する。なお、第8回日本イメージ心理学会大会におけるシンポジウム（大石他，2008）において、本稿の一部が発表されている。

Ⅱ イメージ調査法によって測定される感情イメージとその構造

イメージ調査法によって感情イメージを測定した研究において、繰り返し示されてきた結果として、8つの感情語の因子構造に関する分析とイメージされた対象語の感情的な結びつきに関する分析の大まかに2つを挙げることができる。また、2008年以降も継続的にイメージ調査法によって測定される感情イメージ研究は行われている。そのため、ここでは、イメージ調査法によって測定される感情イメージ研究を、主に1980年代を中心として示された感情イメージの構造、同じく主に1980年代に示された対象についての構造、そして、近年の研究の展開の3つに分けて、イメージ調査法を用いた感情イメージ研究を概観する。

イメージ調査法による感情イメージの構造についての結果の概観

イメージ調査法による一連の感情イメージに関する一連の研究において、上杉（1981, 1982, 1983, 1989）は諸々の対象に共通する一般的な感情構造について因子分析を行っている。イメージ調査法による感情イメージ研究の重要な点の1つは、対象性であるが、様々な対象一般に対する感情構造、および個々の対象についての特徴は、次の5点にまとめることができる。1つ目は、イメージする様々な対象全般についての構造は、2因子構造が示されており、第1因子は、快-不快（もしくはプラス感情-マイナス感情）と解釈されることが多い。2つ目は、その様々な対象全般についての構造に関して、2つの因子の負荷量の相対的な大小関係に注目すると、喜・望・愛が1つのまとまりをなし、恐・悲・怒・嫌がもう1つのまとまりをなすことである。3つ目は、1つ1つの対象の感情イメージの構造に関しては、2因子構造を示すことが多く、2つの因子の負荷量の値によって、6種類に分類されることである。4つ目は、父・母・友人等を対象とする場合の構造は同じ分類にまとめられており、2因子構造を示すことや因子負荷量の特徴が、様々な対象全般についての構造によって示される結果の特徴と類似していることである。5つ目は、父・母・友人等を含む分類を除く他の5つの分類の構造は、父・母・友人等の分類において示される特徴と異なる点が少しずつあるものの、父・母・友人等の分類の構造と基本的には類似していることである。

このような概観に基づくと、8つの感情は、各種対象に共通する連関関係として、ある程度のまとまりを示し、そのまとまりの相対的な位置関係は安定しているが、個別の対象語について検討すると完全に同様の感情語はないことが繰り返し示されている。これらの結果は、例えば、喜、望、愛のように強いプラス感情を諸対象全般に示す感情でも、対象によってニュアンスが異なる

ことを意味し、今後の研究で、いずれかの感情語をまとめて扱うことは慎重にするべきである。

また、ポジティブあるいはネガティブな感情を喚起させる場面をイメージし、そのイメージの様々な側面について評定を求めた宮崎・菱谷（2004）は、探索的因子分析と共分散構造分析を行っている。探索的因子分析の結果では、ポジティブ・ネガティブの感情喚起場面の間に質的差異が示されている。そして、共分散構造分析の結果においては、イメージ現実感が類知覚的側面および情動的側面に関する下位構造から構成される点がポジティブ・ネガティブの感情喚起場面の間で一致しており、その一方で、情動的側面については両感情喚起場面の間において相違が示された。この結果から、宮崎・菱谷（2004）は、ポジティブ・ネガティブの感情によってイメージ体験の類知覚的側面と情動的側面とが、それぞれ異なる処理を経ている可能性を考察している。

感情を生起させる対象の感情価についての概観

一連のイメージ調査法を用いたによる一連の感情イメージ研究においては、感情構造に関する分析に加えて、それぞれの対象がもつ持つ感情的側面快-不快の程度に関する分析も行われている（上杉, 1981, 1983, 鈴木・大石・松野・堀内・鈴木・藤森・岡田, 2009）。このような分析に基づいて、イメージする対象の間における快-不快の程度についての構造を表す連関図が示されている。なお、上杉（1981, 1983）、鈴木他（2009）が、対象間の構造を連関図として示しているが、その中で最初に行われた研究であることから、ここでは上杉（1981）において示されたイメージする対象の構造についての検討を中心に概観する。

諸対象の快-不快の程度に関する分析においては、“感情価”という合成変数を指標として行われている。一般的には、快・不快を両極とする1次元の連続体を想定した場合の、その連続体上の相対的位置を感情価もしくは快価（hedonic value）とされている（今田, 1999）。それに対して、イメージ調査法によって測定されるよる感情イメージの研究において用いられている感情価の計算方法は、研究の進捗によって度々変更が加えられているが、概念的には、様々な感情を快-不快（あるいはプラス感情-マイナス感情）の軸上に押しなべた上で連続体上のどこに、その対象がどこに位置するかを示す変量といえる。そのため、ここでの感情価の数値の求め方は独特であるが、概念的な意味合いは、一般的な感情価と著しく隔たりがあるわけではない。

上杉（1981）では、このようなイメージ調査法によって測定されたよる感情価を指標とする諸対象についての因子分析の結果、7因子構造が示されている。各因子に含まれる対象語に対する各調査対象者の感情価を因子ごとに合計した値を「感情価尺度得点」とし、これをもとに尺度（因子）間の相関関係をまとめた連関図を図1に示す。図1は、左側に原因と考えられる対象を配し、右側に結果と考えられる対象を配置し、それぞれの対象語に伴う感情イメージのポジティブ-ネガティブの程度に関する相関についてまとめている。そのため、現代的に言えばパス図と同様の性質を持つということになる。図1に示される諸対象の連関の中心は、“生活・社会”であるが、最も規定的で根源的と考えられるのは“家族”尺度としているのである。“生活・社会”の内側の連関については「生活」、「社会」、「生」が中心であるが、「私」のイメージのための基本になっているのは、「仲間」、「友人」、「生活」のイメージであるとしている。

図1に示す学生を調査対象とした感情イメージ研究の発展として、上杉（1983）は、労働者を調査対象者としたイメージ調査を実施し、労働場面における感情イメージの関連性を検討し、図1と同様の図にまとめている。この労働場面における感情イメージの関連性では、学生の生活場面における諸対象の関連と異なる部分も多く含まれる一方で、家庭生活が様々な対象についての

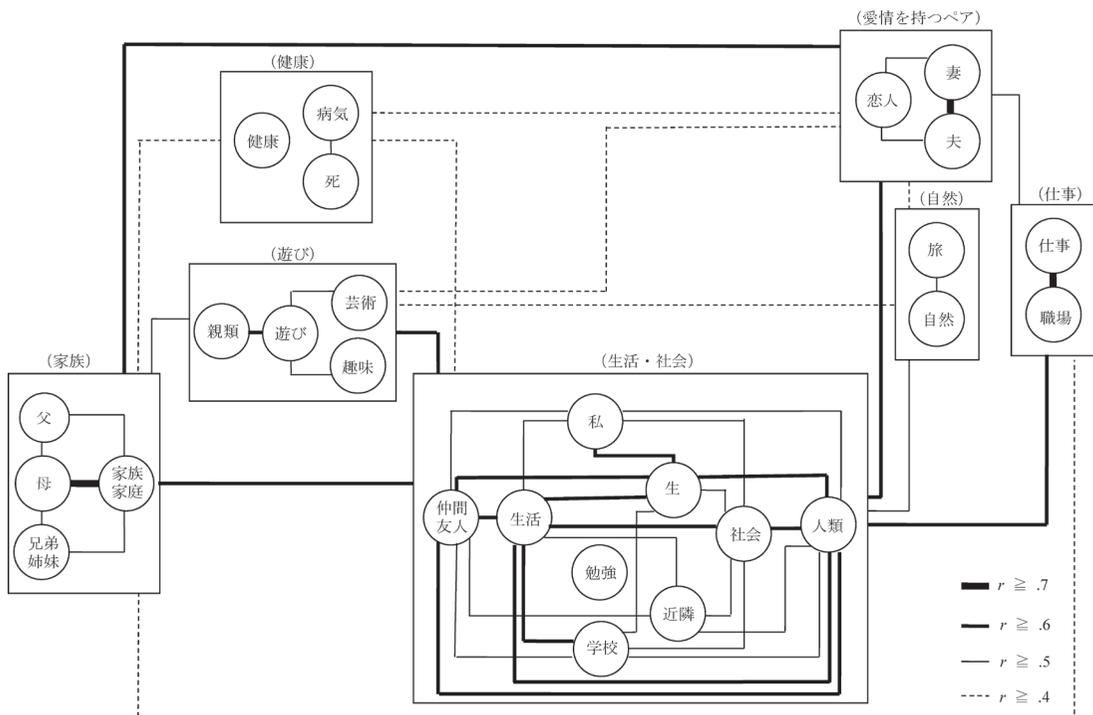


図1 感情価に基づく尺度（因子）および対象の連関（上杉，1981，p.29，図3を改めて作図）

感情イメージに影響をもたらす根源的な対象であるという共通する特徴も示されている。

2000年以降のイメージ調査法を採用した基礎的研究

これらの研究と関連して宮崎・本山・菱谷（2003）において調査の対象とされた名詞263語についてのイメージしやすさ（イメージ価）についても調査が行われており、感情価の調査結果と併せて、言語によってイメージを喚起する研究のために貴重な資料となる。また、イメージ調査法による感情イメージ研究の発展として、上杉・鈴木（2000）は、イメージ調査法とTPI（東大式パーソナリティ・インベントリ）との比較から、感情イメージと人格特性に関する検討を行っている。

さらに、近年のイメージ調査法を適用したによる感情イメージ研究として、鈴木他（2008, 2009, 2010）がある。鈴木他（2008）は、1980年代を中心に行われた感情イメージについての結果を、およそ20年間の年代を経て行われた同様の手続きのイメージ調査によってと比較、検討し、感情構造の安定性を示している。鈴木他（2009）は、上杉（1981）によって示された諸対象の連関（図1）を、感情価に基づく共分散構造分析によって検証し、上杉（1981）が示した諸対象の連関図（パス図）と異なるところもあるが、基本的には類似するパス図が結果として示された。また、鈴木他（2009）は、その共分散構造分析によって抽出された11の感情価尺度とNEO-FFIによって測定された人格特性の関連性についても検討したところ、感情価尺度得点とNEO-FFIを構成する5次元の間の相関が示されている。さらに、イメージ調査法では、Plutchik（1960）に基づいて8つの感情語が採用されてきたが、その感情語を増やして検討することも行われており、対象語の感情価の連関性が一層明確に示されている（鈴木他，2010）。このように、感情イメージに関する諸対象の連関性や人格特性との関連などの検討には、上杉

(1981) が提唱した感情価が用いられており、このことは、この感情価という変数が様々な事象や対象に関するイメージに伴う感情的側面を体系的に捉えるための測度としての有用性を示唆しているといえる。

Ⅲ イメージ調査法による感情イメージ研究の応用可能性

イメージ調査法の dating violence (デート DV) への適用

上杉 (1983) はイメージ調査法を労働場面に適用し、職場で不適応を起こして心身に問題を抱える労働者に対する処方箋を作成できることを示唆した。しかし、イメージ調査法は、その性質上その実施手続きはSD法などの一般的な調査法と類似しており、特定の集団や場面に依存しない調査法であるので、他の集団や臨床場面においても、感情とその感情を喚起する対象についての認知との関連性を検討しうる。ここではイメージ調査法による感情イメージの応用を指向した研究例として、松野 (2011) による dating violence (付き合っている若者の間の暴力) へのイメージ調査法の適用を紹介する。

松野 (2011) が大学生 (男性 116 名, 女性 139 名, 平均年齢 19.9 歳) を対象として行ったイメージ調査の基本的な手続きは上杉 (1981, 1982, 1983 等) と同じである。対象語は dating violence に関する 10 の対象語 (恋愛, 結婚, デート, 支配, セックス, 無視, 束縛, 服従, 暴力, 対等) であり, 8 つの感情語は上杉 (1981) と同じ 8 語であった。

これらの dating violence に関する 10 の対象語の間における関連性を把握するために行われた感情語に対する因子分析の結果 (松野, 2011) は, 2 因子構造を示し, 並びに 2 因子のそれぞれにおいて因子負荷量が顕著な感情語などの特徴について, 上杉 (1981, 1982, 1983) と同様であった。さらに dating violence に関する対象語の感情価について因子分析を行ったところ, 第 1 因子として, 支配, 服従, 束縛, 暴力, 無視の 5 つの対象語が, また, 第 2 因子として, 対等, デート, 恋愛, 結婚, セックスの 5 つの対象語がそれぞれの因子として抽出され, 第 1 因子はそれぞれを「他者コントロール」, 第 2 因子はおよび「親密さ」を反映する因子として解釈されている。松野 (2011) は, 各対象語の感情価の相関係数に基づいてから作成した男性と女性男女別の連関図を示している (図 2, 図 3)。図中の線は .50 以上の相関関係を示す。連関図の作成にあたっては, 各因子に関する対象語同士を互いに他者コントロール因子に関連する対象語同士, また, 親密さ因子に関連する対象語同士をそれぞれ近い位置に配列し, さらに暴力と対等を, それぞれの因子を意味的に包括する対象語として位置づけ配置した。また, 親密さに関する対象語は, 恋愛から結婚に至るプロセスを表現するものとして様に, 連関図の左側から右側の順に沿って配置した。

男女の連関図を比較すると, 女性では, 他者コントロールに関する対象語と親密さに関する対象語との間には強い相関がなく, 対等は親密に関連する対象語の中でも独立していることが特徴的である。他方, さらに, 男性では, 他者コントロールに関する対象語と親密さに関する対象語との間には多数の相関が見られ, また恋愛とデート, 対等と無視との間に, また対等と暴力とに負の相関があることが見られた。すなわち, 暴力や束縛, 支配, 服従に対して, ポジティブな感情を抱く者は, 無視に対してもポジティブな感情を抱いており, 逆に, 恋愛とデートにはネガティブな感情を抱いている。

このように男性では, 他者コントロールに関する対象語と親密さに関する対象語が, 強い関連

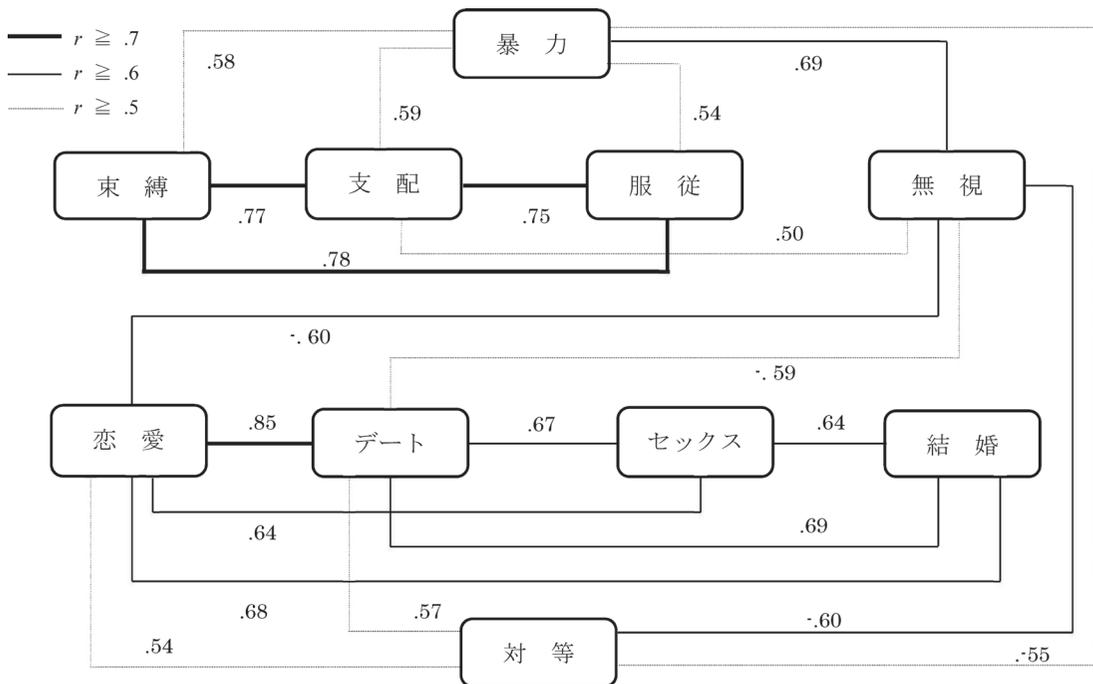


図2 DV関連の対象に対する男性の感情価の連関（松野（2011）の結果に基づいて作図）

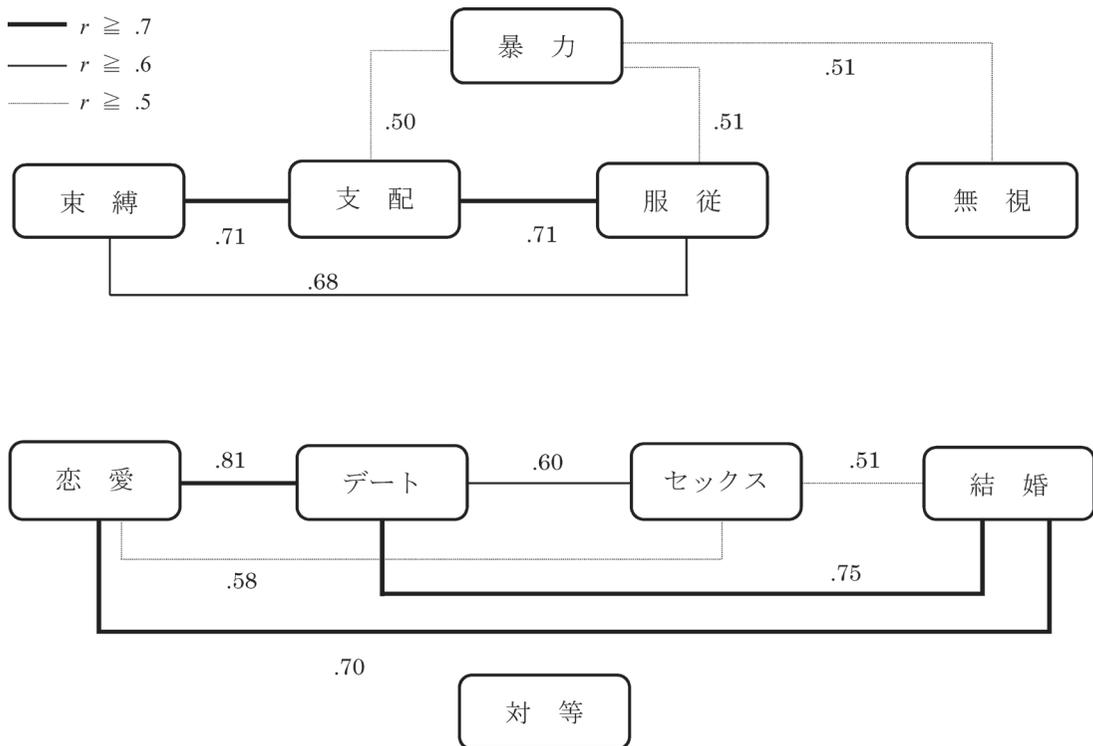


図3 DV関連の対象に対する女性の感情価の連関（松野（2011）の結果に基づいて作図）

性を持つ構造となっており、恋愛やデートにネガティブな感情を抱くと、暴力を通して相手をコントロールしやすいことを示しているが示されている（松野，2011）。

これらの結果は、DV（domestic violence; 夫婦間の暴力）や dating violence の加害者は、男性に多いこと（Bancroft & Silverman 2002 幾島訳 2004）、また、加害者は、相手の行動や対人関係を監視・制限する、相手を無視したり性行為を強要するなど、支配的で強制的な行動傾向にあるとした諸研究（Garcia-Moreno, Jansen, Heise & Watts, 2005; Bancroft & Silverman, 2002）と一致している。図2及び図3から松野（2011）の結果は、Garcia-Moreno et al. (2005), Bancroft & Silverman (2002) などによって臨床場面で経験的に示されてきた dating violence の加害者の行動特性をさらに支持する一方で、一般の若年男性において、潜在的に加害者となる可能性が高いことも明らかにできたしている。これらはイメージ調査法感情イメージ研究が、dating violence に関する感情的側面の構造を記述できることを示している。

なお、イメージ調査法によるこのような構造の記述は場面やテーマに依存するとは考えにくく、この調査法が適用不可能なテーマや対象を理論的に指摘することは困難である。そのため、dating violence に適応できたという松野（2011）の成果は、イメージ調査法の適用範囲の理論的な検証とはなりにくい、イメージ調査法を具体的現実的な問題の把握について現実的に適応した研究例は他に例がなく、その意味においてイメージ調査法の有用性を示唆していると言える。dating violence を引き起こす背景として恋愛やデートに対する男性の否定的な感情が推察されたように、イメージ調査法による感情イメージ研究の応用可能性を示唆していると言える。

IVまとめ

本研究は上杉が行ったイメージ調査法による感情イメージに関する研究を俯瞰し、その理論と方法を紹介した。上杉これらの研究の特色は、感情イメージという構成概念を生成することで、私たちの日常生活における感情を喚起する対象についての認知と感情との関連性を記述したことである。このような視点は評価理論（Roseman, 1984）に共通するものがあり、現在では神経科学でのソマティック・マーカー仮説（Damasio, 1995 田中訳 2000）からもうかがえるように、認知と感情の間に深い関連性があるという視点は特に新しいものではないかもしれない。しかし、1970～1980年代においては、イメージ調査法による感情イメージは非常に特異な概念であったと言っても過言ではないだろう。

イメージ調査法では言語によって刺激提示をしているため、認知の中でもとりわけ言語を避けて感情イメージを探求することはできない。感情イメージの測定方法としては、例えば上杉・佐々木（1980）による「俳画的箱庭」を用いた方法も可能であるが、現在のところそのような方法による研究は少なく、言語を仲介しない感情イメージの方法についても検討が必要である。そして、上杉・鈴木（2000）は意味場という概念によって言葉によるイメージの生成とそのイメージに伴う感情的側面について議論しているが、十分に論究されているとは言い難く意味場という概念も今後の検討課題である。また、言語との関係は感情の概念として述べられており、様々な感情を表す言葉に分節化して扱っている（Cornelius, 1996 斎藤訳 1999）。それに対して、ある1つの対象についての諸々の感情を統合化して扱っているところが感情イメージの特徴であると考えられる。

感情イメージの特異性は、職場や日常場面での人間関係に代表される、認知や感情が複雑に関

与する問題を解決するために、上杉が考案した結果、生成されたと思われる。職場や日常場面での人間関係に代表される、認知や感情が複雑に関与するこれらの問題は、主として臨床心理学の知見によって解決が図られてきたが、イメージ調査法による感情イメージによって、より定量的に取り扱うことが可能な心理学の問題として再定義されたといえよう。

このように、イメージ調査法による感情イメージは独自の視点から生成されたため、構成概念の妥当性に関する問題点が残されていると考えられる。これらを解決するためには、下記に記述するいくつかの問題を検討する必要がある。一つは、感情イメージという構成概念と他の感情理論が取り扱っている感情との対応を考慮する必要がある。代表的な感情理論を記載している Handbook of emotion (Frijda, 2004) によれば、評価理論は一つの感情理論にすぎない。したがってダーウィンから端を発した生物学的機能及び適応機能を重視した立場や社会的、文化的な産物としての感情を重視した立場等、他の主流の感情理論あるいは感情イメージの研究が扱う感情の捉え方とイメージ調査法による感情イメージとの相違を検討する必要があるだろう。

また、感情イメージをイメージ調査法以外の測定方法によって検討する必要がある。感情イメージに関しては、多次元尺度構成法 (MSD) に類似した測度を用いて測定された結果は多く報告されているが、その他の測定方法による検討は行われていない。この理由は、感情イメージの概念が確立される前にイメージ調査法による研究が進められ、理論的基盤に基づく測定方法が未完成であるために、理論から生成される測定方法が構築されなかったためと思われる。理論と方法論を完成させ、両者を循環させることにより、感情イメージの妥当性を高めることになると思われる。

さらに、分析方法を洗練させる必要もあるだろう。連関図は単純な相関係数から構成されているパス解析であり、統計的に統制できる交絡要因が除去されていない可能性が高い。しかし、感情イメージを検討する際に用いられる因子分析は、共分散行列を元に行っている。そのため、上杉が提案した感情イメージの測定法から得られる共分散行列を元にして、現在の心理統計で多く用いられている共分散構造モデリングを適用できる。したがって、上杉が呈示した統計モデルよりもより統計的に妥当性の高いモデルに拡張可能である。

このように、感情イメージは解決すべき点が多岐にわたっているが、上杉 (1982, 1983) がおこなった社会人に対する研究や DV dating violence の感情イメージの検討からもわかるように、感情イメージは日常的問題の理解やその解決に大きな役割を担うと考えられる。また、日常の問題ばかりでなく、感情イメージの構成概念の妥当性を高めることによって、感情やイメージの理論的な理解を深めうる概念的な道具としての利用も期待できると考えられる。

引用文献

- Bancroft, L., & Silverman, J. G. (2002). *The batterer as parent: Addressing the impact of domestic violence on family dynamics*. California: Sage publications.
(バンクロフト, L.・シルバーマン, J. G. 幾島幸子 (訳) (2004). *DV にさらされる子どもたち - 加害者としての親が家族機能に及ぼす影響 -* 金剛出版)
- Cornelius, R. R. (1996). *The science of emotion: Research and tradition in the psychology of emotion*. New Jersey: Prentice Hall.
(コーネリアス, R. R. 斎藤勇 (訳) (1999). *感情の科学 - 心理学は感情をどこまで理解できたか -* 誠信書房)
- Damasio, A. R. (1995). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Harper Collins

Publishers.

(ダマジオ, A. R. 田中三彦 (訳) (2000). 生存する脳-心と脳と身体の神秘- 講談社)

- Frijda, N. H. (2004). The psychologist's point of view. In M. Lewis, M., & J. M. Haviland-Jones, J. M. (Eds.), *Handbook of emotions : Second Edition*. New York : The Guilford Press, Pp.59-74.
- Garcia-Moreno, C., Jansen, H. A. F. M., Heise, L., & Watts, C. (2005). WHO multi-country study on women's health and domestic violence against women: Initial results on prevalence, health outcomes and women's responses. Geneva, : WHO press.
- 堀内正彦・鈴木賢男・松野真・鈴木国威・大石昂・岡田斉 (2020). イメージ調査法によって測定される感情イメージの展望 (1) - その理論的背景 - 生活科学研究 (文教大学附属生活科学研究所紀要), 42, 113-120.
- 今田純雄 (1999). 感情価 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 p.142.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学 青土社
- 松野真 (2011). 若年層における dating violence の予防教育推進のための要因に関する研究 日本学術振興会 : 平成 21 年度科学研究費補助金・研究実績報告書
- 宮崎拓弥・本山宏希・菱谷晋介 (2003). 名詞, 形容詞の感情価-快-不快次元についての標準化- イメージ心理学研究, 1, 48-59.
- 宮崎拓弥・菱谷晋介 (2004). ポジティブ・ネガティブ情動イメージの構造 イメージ心理学研究, 2, 35-50.
- 水島恵一 (1978). 実証的かつ実感的体験研究の方法-「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて - 文教大学紀要, 12, 1-11.
- 大石昂・鈴木賢男・堀内正彦・松野真・鈴木国威・藤森進 (2008). 「感情イメージ」とは何か-上杉喬のイメージ心理学を読み解く- イメージ心理学研究, 6, 19-43.
- Plutchik, R. (1960). The multifactor-analytic theory of emotion. *Journal of Psychology*, 50, 153-171.
- Roseman, I. J. (1984). Cognitive determinants of emotion: A structural theory. *Review of Personality & Social Psychology*, 5, 11-36.
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2008). 「感情イメージ調査」についての研究 - 年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 30, 121-132.
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2009). 「感情イメージ調査」についての研究 (II) - 諸対象についての感情価尺度の因果論的構造と性格次元との関連性- 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 31, 189-205.
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2010). 「感情イメージ調査」についての研究 (III) - 個別対象の感情イメージ構造の安定性と対象語・感情語の選定- 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 32, 173-188.
- 上杉喬 (1981). 感情イメージの研究 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 3, 22-38.
- 上杉喬 (1982). 感情イメージの研究 (II) - 労働場面における感情イメージ- 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 4, 29-41.
- 上杉喬 (1983). 感情イメージの研究 (III) - 労働場面における感情イメージの諸関連- 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 5, 11-20.
- 上杉喬 (1989). 感情イメージの研究 (IV) - 対象による違いと性による違い- 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 6, 1-11.
- 上杉喬 (2004). イメージの世界 文教大学臨床心理学科編集委員会 (編) 人間科学としての臨床心理学 金剛出版 pp.17-34.
- 上杉喬・佐々木正宏 (1980). 『俳画的箱庭』における感情投影の基礎研究-試論- 体験と意識に関する総合研究 第2集 (文教大学人間科学研究会報告書), 95-99.
- 上杉喬・鈴木賢男 (2000). 感情イメージの研究IV - 感情価とパーソナリティ特性の関連- 生活科学研究 (文教大学附属生活科学研究所紀要), 22, 121-132.

